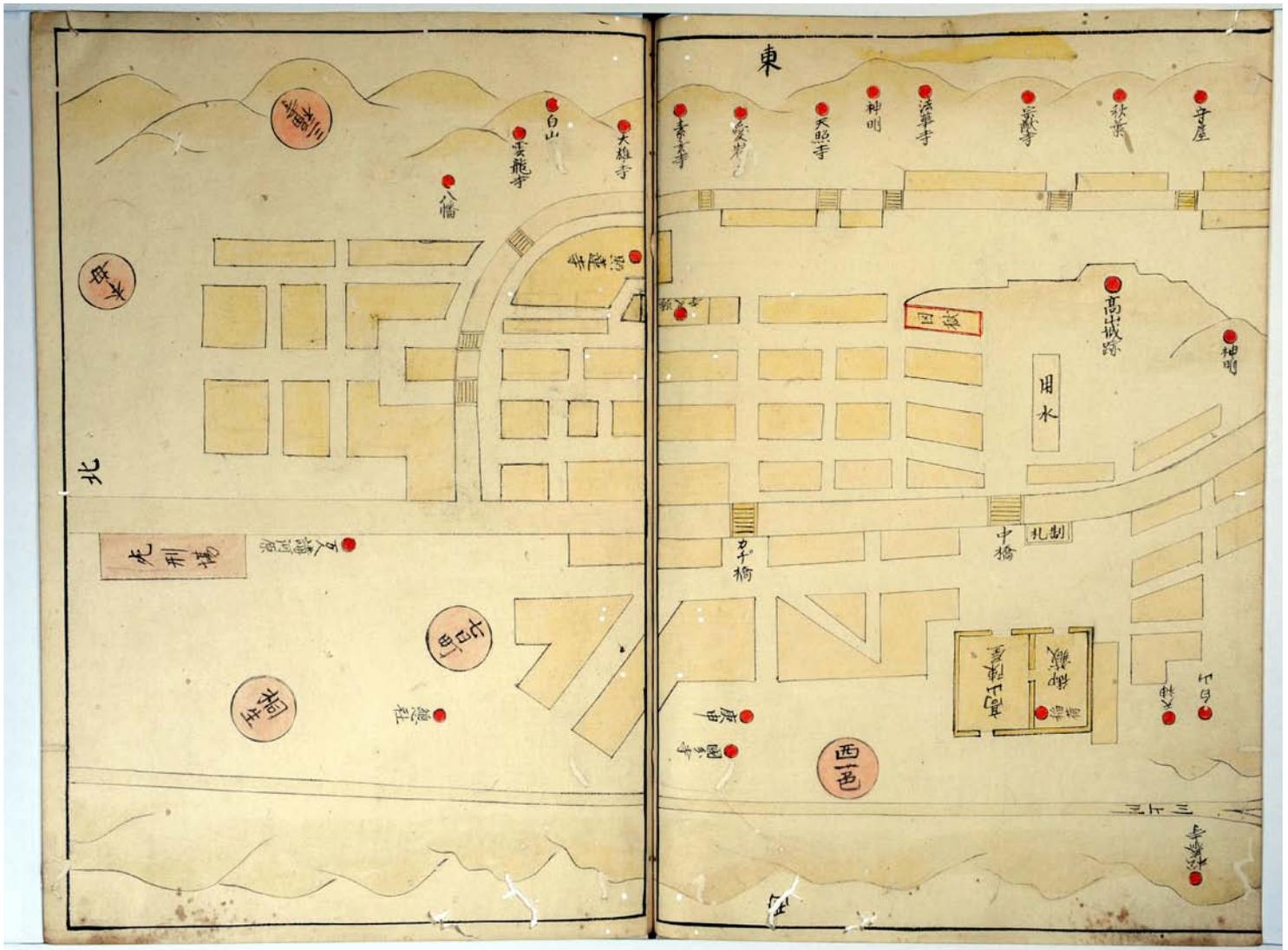


(第 33 図)



(第31図)

(30) 高山城図、高山城下町絵図 (第33図、第31図)

年代 第33図 金森時代

第31図 幕府直轄地時代

寸法 第33図 12×17.5 (『飛州志』掲載寸法)

第31図 26.7×34.8 (『飛州志』絵図関係を集約した和綴の原本寸法)

所蔵 第33図『飛州志』所載

第31図『飛州志』原本・高山市教育委員会

『飛州志』(註14)の308頁には高山城図が、303頁に高山城下町絵図が挿入されている。

第33図は高山城図で、本丸、二ノ丸(庭樹院殿屋敷)北廊(二ノ丸)、三ノ丸、南ノ丸(岡崎蔵)、堀が簡略化されて描かれ、規模も記入されている。橋は大手橋、中橋、鍛冶橋の名前が記入され、城下町側の橋詰めには柵が見られる。

図は簡単であるが、本丸は57間・30間・石垣高さ5間以上と規模が記入され、金沢藩が管理している時期の絵図を参考にしたものである。

第31図の高山城下町絵図は、飛州志刊行本の挿図の基になった原本である。簡略的に描かれ、寺院は赤丸を付してしっかりと表記されている。万人講川原の北側には死刑場と大きく書かれる。「高山陣屋、御蔵」の建物名、中橋詰めの「制札」など重要な場所が表記されている絵図である。このように、『斐太後風土記』『飛州志』には城下町絵図、

城郭図が記載されているが、それ以外の史書には文書のみで高山城の項について記述してあるので、以下に紹介する。

(註 14) 長谷川忠崇著 岡村利平編・解説 『飛驒資料 飛州志
(誤字脱字訂正版)』 住広造活字原本発行明治 42 年 6 月 28 日
複製刊行岐阜日々新聞 岐阜県郷土資料刊行会 昭和 44 年 10 月 20 日刊行

①『飛州志』高山城の項→高山城について図と説明を所載している。

「元来天神山ハ大凡国府ノ中央也(中略)西方ニ国府ノ市肆列リ宮川其前ニアリ北ハ平陸ニ続キテ東ハ後地深泥也南ニ堀切リアリ四方ノ山峰遠ク見切ッテ対スルモノナシ地堅尤相応ノ勝地ト可謂歟」

「天正十六年戊子ヨリ慶長五庚子ニ至ツテ営作悉ク全備ス」

「本丸ノ山上ヨリ尾崎長ク片野ノ山王山に続キタリシヲ法印其中間ヲ堀切リタルニヨリ一山独立スルガ如シ」

②『飛驒国中案内』(註 15) 高山城の項→高山城について立地の良さを説明している。

「城郭の構へ、凡日本国中に五つとも無之見事成る能き城地のよし承之候」と記し、「天正十八年より比城普請始、十三年にて漸二之丸迄出来ず、夫より三之丸まで始終十六年にて成就す。」とある。

③『安川記』 (所収:『大野郡史上巻』(註 16)) →大正 16 年

から城下町建設が始まった事が記されている。

「同(天正)十六年より諸士の知行割、城地及家中の邸宅、並に町家の地図検分あり」

④『岷江記』 (所収:『高山別院史上巻』(註 17)) →長近が、完成した照蓮寺から、城の普請を遠見したという。

「天正十七年、五明の敷地を改易し城の地どりに相むかひ、(中略)御堂・庫裡程なく成就せしかば、大守照蓮寺に入来しおはしまして、御城の普請を遠見し給ひけり。」

「城の地どりに相むかい、照蓮寺は城にそむかず城はまた寺にさからはずして互に守り守らんと、寺をば城に向はしめ、城をば寺にむかはせて、仏法世法諸共に互に背かぬ和順の表事、めでたき所造の企とぞ聞えし。」

⑤『飛驒軍乱治国記』 (所収:『神岡町史特集編』(註 18)) →高山城は、慶長 8 年(1603)の三之丸完成をもって全て完了した。16 年の工事期間。慶長 5 年には、三之丸が完成していない。

「天正十四年に金森法印長近は、古川の蛤ヶ城に移り、間二年有て、高山に新城の普請始、二之丸迄に十三年にて出来ず。其後三之丸迄に以上十六年にて城成就す。」

『飛驒国中案内』の記述が 2 年ずれているとすれば、年代は他の文献と一致する。『飛驒軍乱治国乱』と『飛驒国中案内』は同じ作者であり、いずれかが誤記してあることは明白である。

⑥『願生寺由来記』(所収:『高山別院史資料編』(註 19)) →高山城築城に際して地形を大きく変えた。

「今の城山は北の尾崎を国中の人足寄り集まり、遙か引下しひきとる跡は二ノ丸、三ノ丸の敷地となり、引埋る所は寺敷となる。その間は広々たる平地に均して大馬場にして左右は今の御侍屋敷、それより西低りては上有地や大野の通りに一番町、二番町、三番町として町屋敷に下さるる。」

「松倉断絶の歩人足今日も今日もに夜ぶかから、畚持ち石担ひ夏冬通しに憂き事に会ひて、今の城山は北の尾崎を国中の人足寄り集まり、遙か引下し云々」

⑦『飛州軍乱記』(所収:『神岡町史特集編』(註 20)) →当時高山城の城代は遠藤宗兵衛であった。

「高山に新城を築き、遠藤宗兵衛に千五百石の知行を与えて高山の城代とせり」

⑧『田能村記』（所収：『飛驒遺乗合府』（註21））→関ヶ原の戦いの時も遠藤が城代であった。

〔慶長5年（1600）〕「稲葉氏當国へ可討入にて（中略）宗運一両日過ぎて高山へ出て遠藤宗兵衛本丸に居る所へ行て家老衆一座談合し云々」

⑨『古狸怪異』（所収：『飛驒遺乗合府』（前掲註21））→高山

城の作事にあつた大工は各地から集められた。

「高山御城御普請の砌京都より金森法印公兼ねて御馴染にてやありけん大工儀左衛門といふものを飛州へ御召ければ當所へ罷越三ヶ年餘相勤め夫よりまた京都へ帰りける然に當国滞留の内に石浦村に大工長兵衛といふものありけるが同職の連に懇意にいたし云々」

『慶長11年（1606）建立の水無神社拝殿棟札』より抜（所収：『飛州志』（前掲註14））「作事奉行濃州住人宗清・同（大工）棟梁越中国住人小右衛門尉以之」

『一之宮神社手伝之事・定書』より抜（所収：『飛州志』（前掲註14））「他国之大工並諸職人云々」

⑩『宇野定賢日用宝』（所収：『飛驒春秋第一号第七号』）「金森重頼江名子川切替について」（註22）→元和9年（1623）金森3代重頼は江名子川を照蓮寺の東北地点で西の方向に堀り、切り変えた。

「江名子川は東山麓より直に桜山麓を北流して合崎に至て大八賀川に合して共に宮川に入たりしを元和九年癸亥金森候（3代出雲守重頼朝臣）弟重勝朝臣を分家左京と称し、高原郷の領主として其邸前の濠代に江名子川を折て正面へ堀通し宮川に濺き其旧蹟を田畑に開拓云々」

（註15） 上村木曾右衛門著 校訂解説大野政雄 『飛驒国中案内』

岐阜県郷土資料刊行会 昭和45年12月1日刊行

（註16） 田中貢太郎編集兼発行 『飛驒国大野郡史 上巻』 大正14年1月30日発行

（註17） 高山別院史編さん室編 『高山別院史 上巻』 真宗大谷派高山別院 昭和58年5月15日発行

（註18） 岐阜県吉城郡神岡町発行 『神岡町史 特集編』 昭和57年4月30日発行

（註19） 高山別院史編さん室編 『高山別院史 史料編』 真宗大谷派高山別院 昭和60年7月31日発行

（註20） 岐阜県吉城郡神岡町発行 『神岡町史 特集編』 昭和57年4月30日発行

（註21） 桐山力所編纂 『飛驒遺乗合府』 住広造 大正3年9月15日発行

（註22） 『飛驒春秋第一号第七号』 昭和31年発行

※掲載されている情報（文章、写真など）は、著作権法上認められた例外を除き、高山市教育委員会に無断で複製・引用・転用・転載などの利用をすることはできません。